

フィールドワーク便り

スリランカの老人

— 来世に向かった慈善・積徳行為 —

中村 沙絵*

2年前、私はスマトラ沖地震による津波をきっかけに、スリランカを訪れた。そこで NGO の活動に参加しながら、現地の若者とともに、多くのお年寄りにも出会った。それ以来、私はすっかりスリランカが好きになり、スリランカという社会をもっと知りたいと思うようになった。

ところで、これまでのスリランカについての多くの研究は、成人男女の視点からなされてきた。では、お年寄りの視点を通して見たとき、いったいどんな社会が描けるのだろうか。そう考えた私は、スリランカでお年寄りの研究をすることにした。ここでは、フィールドワークを通して出会ってきた多くのお年寄りのなかでも、とくに印象深い2組の老夫婦を紹介したい。

初めてのスリランカと、ピーリス夫妻

スリランカの宗教というと仏教のイメージが強いが、私にとって最初のイメージは、カトリック教徒であるピーリス夫妻との出会いにより形作られた。2人が住んでいるのは、モラトゥワという海岸の町である。スリランカ西南海岸沿いの国道を、大都市コロンボ

からバスで1時間ほど南下したところにある(写真1)。

町の中心には、聖セバスチャン教会がある。ピーリス夫妻は、とくに体の調子が悪くなければ、家から徒歩10分ほどのその教会へ毎朝6時に出掛けてゆく。ポルトガルによる植民地化以来、スリランカの海岸部にはキリスト教が広まった。このモラトゥワもキリスト教色の強いことで有名である。

私が初めてこの町を訪れたのは大学院に入る前で、そのころはまだ、あの恐ろしい津波の傷跡が随所に生々しく残っていた。NGOの知り合いから、私を下宿させてもいいと



写真1 スリランカ西南海岸の浜辺

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

言っている老夫婦がいる、と聞いてやってきた。そこで出迎えてくれたのが、このピーリス夫妻であった。私は、おばあさんの方をアンマ（お母さん）、おじいさんの方をターティ（お父さん）と呼んだ。

一緒に暮らしているうち、私は2人がいるいろな病気を抱えていることを知った。アンマもターティも糖尿病で、さらにアンマは心臓病も患っていた。慢性的な膝の痛みもあって、長距離を歩くと体全身がどっと疲れてしまう。アンマは、10数種類の西洋医薬品を近くの薬屋から購入し、それらを朝、昼、晩と飲む。うっかり忘れてしまうと胸部が痛み、血糖値があがるので、ターティはその都度叱る。こんな状況にあっても、親のように私を見守ってくれる2人に、私は甘えきっていた。

そして、今でも忘れられないことが起こった。私は津波の被害を受けた浜辺の集落で援助の実態調査をしていたのだが、アンマとターティから「浜辺はとくに不用心だから、日暮れ前には必ずもどってくるように」といっつも念を押されていた。しかし、この日ばかりは、どうしてもインタビューが長引いてしまった。終わった頃はもう辺りは薄暗く、不安が募った。何度か家に電話をかけたが繋がらない。不穏な心持ちで家に帰ると、私を心配するあまり、アンマは心臓発作を起こして寝込んでしまっていた。私は、ベッドで苦しそうにしているアンマと初めて怒ったターティを前に、ドアの傍で立ちすくんでしまった。心もとなさと申し訳なさに困惑し、涙が溢れたのを覚えている。

当時は英語しかできなかつたので、アンマは私のために“sacrifice”を払っているのだと何度も口にした。「犠牲」という語のここでの意味合いがよく解っていなかつた私は、心で深く詫びながらも、少しむっとしてしまうこともあった。なぜそもそも身体が大変な状態で、私をひきとろうと思ったのかと、強い口調で聞き返したこともあった。

後にわかつたのであるが、アンマにとって、私をひきとることは一大決心だったのである。彼女の背中を押したのはターティのひとことであった。「他に寄る辺もなくお金もない学生を2ヵ月間もホテルに泊まらせるなんて“sin”（罪）なことじゃないか、私があなをサポートするからひきとろう。」寄る辺のない一文無しの学生を放っておくのは、彼らにとって罪なのである。アンマはカトリック教徒であり、来世には天国で神をみるのが、最上の願いだ。そのためにも、他人の痛みも自分のものとして引き受け、時間や労力を無償で与えること、すなわち犠牲を払うことに大きな人生の価値をおいていたのである。それはターティも同じであった。

だからこそ、私は2人のもとの来ることを許され、アンマが倒れたあとも居候し続け、そして、アンマは、私のために「犠牲」を払い続けた。彼らは私を娘として扱った。結局、彼らは最後まで私から一銭のお金も受け取らなかつた。

アンマは孫の面倒をみるために、教員の職を49歳で辞めたのだが、彼女の意に反して子どもの家族と一緒に住むことはなかつた。アンマによると、彼女はこの件で落胆し、糖

尿病を患ったという。それでもアンマの活躍ぶりには、目を見張るものがある。なんといっても74歳にして、近所の学校で英語の教師を引き受けている。校長である牧師さんに、英語教師に対する教育を頼まれたのがきっかけだったというが、交通費だけもらい、月曜日から金曜日まで休み無く働く。働いたあとは、近所に住む次女の家へ寄る。ご飯を食べ、残りの仕事をし、時には孫の勉強をみて、少し休息する。そして夕方6時ごろ、次女の夫が車で家まで送る。ターティはというと、アンマの薬を購入するために続けている家具屋の仕事を終えて、6時半に帰る。近所のおばさんから購入する家庭料理で早めの食事をすませ、アンマは疲れてベッドで休む。1日の終わりだ。それをみて、蚊帳をそっとかけてあげるのが、毎晩のターティの役目であった(写真2)。

私が老人ホームに行き始めたころ、アンマはこんなことを話してくれた。「あそこの老人ホームに、起きられない寝たきりの高齢者がいたら、そのひとたちに衣服をあげたいと

思っているの。できれば1人1人身体を洗ってあげて、着せてあげたい。サエ、どう思う？」

アマラシリ夫妻

初めてのスリランカ滞在から1年半ほどたち、私は再びスリランカに赴いた。そして、毎日のようにコロンボ郊外の老人ホームに行き、そこにいるおばあさんたちと、行動をとりにしていた(写真3)。

彼女たちに混じって、ホームに近接する仏教寺院に通うのは、水曜日と金曜日の午後4時であった。向かった先で行なうのは、菩提樹供養(ボーディ・プージャ)である。菩提樹供養というのは、ブッダが悟りを開いたとされる菩提樹に花やココヤシ油や水などの供物を捧げて、お祈りをする儀礼だ。10人程度の高齢の女性が、白いサリー(オサリ)や洋服を身につけ、髪をきちんと結び、各自香しい花やロウソクをもってやってくる。この供養には、老人ホームのおばあさんたちだけではなく、近隣の敬虔な仏教徒も



写真2 次女の家で残りの仕事をするアンマ



写真3 ある老人ホームでの一場面
近所の子どもがよく遊びにくる。

参加している。私はこの菩提樹の下で、初めてアマラシリの奥さんに出会った（写真4）。

この儀礼で、はじめにお経を唱えるのが、このアマラシリの奥さんの役目だ。彼女が供養を先導していく。お経が書かれた本は各自持参で、供養の前には文字を読むためにみな眼鏡をかける。でもアマラシリの奥さんはかけない。すべて暗記しているからだ。

アマラシリの奥さんが菩提樹供養を始めたのは、10年ほど前であった。そのころ親しい仲にあったマニヨ（比丘尼）がこの集会を始めたが、彼女が亡くなる前に「この供養だけは死ぬまで続けるように」と言葉を残したそうで、アマラシリの奥さんはこの約束を守り続けている。

これ以降、私はしばしばアマラシリさん宅を訪れた。アマラシリの奥さんは、夫をアマラシリ・ピク（比丘）と呼んだ。若いころ木彫りのアーティストであった彼は、子どもが結婚したのちタイで出家し、僧になって帰国した。スリランカでは数少ない托鉢僧だったそうだ。数年前、不意に下半身麻痺となっしまい、奥さんと娘が家につれて帰ってきた



写真4 ホームに隣接する寺院での菩提樹供養

という。今では毎日、白い法衣に身を包み、杖をついて、すり足で、ゆっくり歩く。

スリランカでは一般に、黄色い袈裟が僧侶の衣服であるが、敬虔な在家の仏教徒のなかには、白い法衣を身につけ、僧侶と同じように戒律を守り、在家信徒に説教をする人たちがいる。シンハラ語では彼らを8戒（*ata sil*）もしくは10戒（*dasa sil*）をまもる優婆夷（*upasika*）・優婆塞（*upasaka*）と呼び、尊敬する。アマラシリ・ピクも在家なので優婆塞である。

朝は玄関の外に5メートルほどのびる、手すりつきの小道でリハビリをする。「朝の仕事が終わった」といって家に入ると、ソファに座ってじっとし、呼吸を整える。「彼は、もう耳も遠くなってしまったし、言葉もすぐに出てこないけど、頭のなかにはすべてダンマ・ポタ（経典）が入っているのよ」と、奥さんは目をくりくりさせてよく言った。

2人は、もっていた土地を1人の娘と2人の息子にそれぞれわけようと考えていた。しかし、今住んでいる土地と家を相続させようと思っていた長男は、オーストラリアで永住権を取得したため、帰ってこない。しかし、2人とも平気な顔をしている。子どもたちが幸せにやっているならば、それが一番。そう言って、杖の端と端を引っ張り合いながらじゃれあう。

この夫婦にとって、積徳行為は生活の中心であるようにみえた。上座仏教においては、よい行ない——たとえば、2人の話によると寺院に仏像を寄進したり、菩提樹の枝を支える棒を寄進したりすること——を重ねること

が、来世でのよりよき生に繋がっている。またアマラシリ夫妻は、すべてのものは自分のものではない、という話を幾度もした。「お布施というのは食べ物だとかお金だとかをあげるだけではなくて、そもそも身体もふくむすべてを自分のものと考えず、放棄することなのよ。」そう仏教の冊子を引用し、繰り返し教えてくれた。

そんなアマラシリ夫妻にとって、なかなか手放せないのが、山のように積まれた本であった。家のなかには1室、書庫のような部屋があり、今では誰も出入りしなくなっている。しかし、なかなか捨てられない。

いつか奥さんが、私にプレゼントする本を探し始めたことがあった。奥さんが本棚から1冊の本を取り出す。それを見たビックは「いや、この本は私が誰某から何処何時にもらった本で…」と、なかなか首を縦に振らない。「そんなに執着しないでもいいのに」と奥さんはつぶやく。今度はビックが、1冊もち出す。すると奥さんは「この本はどうしても特別な本で云々…」と話し始める。しまいに

は、小競り合いにまでなってしまった。

「これで仏教のことをちゃんと勉強しなさい」、そう言って2人から渡されたのは、ブッダの初めての説法が収められた『Dhammacakka-pavattana Sutta(初転法輪経)』だった。イギリスの僧院からスリランカを訪れた著名な僧から、特別に2人が受け取った本だそうで、それこそ2人の身体の一部、大切な書籍である。ペンをもてない2人に代わり、私は「2007.3.29アマラシリ夫妻より」と覚書をした。

小さなことに動揺しがちで、優柔不断な私は、揺るぐことのない信念をもって接しようとする彼らの頑強さに時に圧倒されながらも、日本ではこんなつきあいがどれほどできるだろうかと思う。家族の事情や健康の問題があっても、それぞれ慈善や功德を積み、来世に向かって積極的に生きるひとたちの姿に、私はいつも惹かれ心打たれながら、フィールドでの毎日を過ごしている。

選挙フィーバー

—社会分節の想像と創造—

白石 壮一郎*

疾走する乗り合い自動車にゆられ首都カンパラから4.5時間移動したのち、山麓の小さな商都ムバレに着き、乗り換えのために別の

停留所に歩く。空き地にはおんぼろの日本製ワゴン車が無造作に20台ほど並んでおり、定位置の樹下に停泊する車輛付近に重いザツ